阿部正功の生涯と学問 ―人類学・土俗学・考古学―

丸山　美季

はじめに

日本の人類学・考古学の成立、発展に主導的・中心的役割を果たした人物として、坪井正五郎、鳥居龍蔵の名はよく知られている。しかし、その蔭に、草創期の人類学、考古学界を支えた一方で、現在ではその業績が埋もれてしまった人々が数多いたことも忘れてはならない。[1] その中の一人に阿部正功（まさこと）（一八六〇～一九二五）がいる。[2]

阿部正功は、万延元年（一八六〇）に生まれ、七歳の時に陸奥国棚倉藩最後の当主となり、明治維新を迎え、明治一七年（一八八四）に子爵となった。正功は、幼い頃より学問好きで、遺物・遺跡に深い関心を持ち、明治二三年（一八九〇）に人類学会に入会し、自ら熱心に調査発掘を行い、多くの調査記録を遺した。また、同三一年（一八九八）の芝丸山古墳の発掘に関わるなど本格的な発掘にも参加した。当時の学会を彩る人々と親しく交わり、自邸に陳列館を作り収集した遺物を公開するなど、考古学の発展に大きく寄与したといえる。しかし、この正功の足跡は、現在ではほとんど知る人もいない。

学習院大学史料館では、平成二二年度特別展として『目白の森のその昔―学習院と考古学』展を開催し、その一コーナー「日本考古学の礎」において、この阿部正功の知られざる足跡を一部紹介した。[3] 小稿は、この展示をきっかけとして、阿部正功の生涯と学問活動についてもう少し深く追ってみていきたいという目的から、著したものである。ただし、正功が残した収集資料、記録類、書状類は多く、その研究活動の全貌は完全に把握できておらず、今回は素描となることをお断りしておく。なお、展示では考古学的活動に焦点をあてたが、当時の学問の区分が未分化であったことにもよるが、正功の関心や活動が考古学にとどまらなかった点に注目し、その学問活動全般に光を当てることにする。[4]

以下では、正功の生涯を三期に大きく分けて見ていく。第一期として、人類学会に入会する以前として、生い立ちから、学問をはじめて人類学に出会うまで。第二期として、人類学会入会後、明治二〇年代最も活発な活動を行っていた頃。第三期として、芝丸山古墳の発掘をメルクマールとして、明治三〇年代後半以降、学会活動から遠ざかっていく時期。その三期に分けて記述していくことにする。具体的には、正功がつけていた『日記』[5]の中の関係記事や、人類学会の会誌である『東京人類学会雑誌』に出てくる記事などを合わせて分析し、正功の学問活動の変遷を辿ることにしたい。

なお、本文の最後に正功の略年譜を収載しているので、参考にしていただきたい。

一、人類学会入会以前

（一）学問を志す

万延元年（一八六〇）、阿部正功は、老中など幕府の要職を務めた譜代大名の名門である阿部家の一五代当主正耆（まさひさ）の二男として生まれた。生まれ

た当時の領地は、陸奥国白河一〇万石であった。老中の職にあった一六代藩主正外（まさとう）が、徳川慶喜と対立し、兵庫開港問題により罷免され、慶応二年（一八六六）に隠居を命じられ、一七代正静（まさきよ）が家督を継ぎ、陸奥国棚倉に移された。幕府から朝廷へ政権が移り、慶応四年＝明治元年（一八六八）一月に戊辰戦争が始まると、棚倉藩は、奥羽列藩同盟に加わり、幕府側につき新政府軍と戦った。同年六月に棚倉城が落城し、正静は一二月に城地を没収されて東京での謹慎が命じられた。それにより一八代として正功が家督を相続することとなり、明治二年（一八六九）にわずか九歳で、棚倉藩知事に任命された。正功の境遇は、目まぐるしく変わっているが、その間も学問は継続している。

正功が自らの学問の変遷を振り返ってつけた記録がある。[6] この文章の最後で、正功は、七歳から教育を受け、一三歳までは雲中を行くようだったが、一四歳で少し心づき、一八歳で真に学業を脩める事を決心したと、その覚悟の程を述べている。

長文ではあるが、貴重なものなので全文掲載する。

左之文ハ教育ニ係ル

万延元年正月廿三日白川ニ生ル、五歳ニシテ江戸ニ出府シ西丸下ノ官邸ニ住ス、時ニ元治元年秋九月ナリ、慶応元年冬山下門内之邸ニ転居ス、同二年ノ春最早七歳相成ニ依リ習字ヲ学ブベシトノ事ニテ八木氏ヲ師トシテ毎日午前ヨリイロハ四十八字ノ習字ヲ学ヒタリ、同年秋外池氏出府ニ付、同氏を師トシテ唐流ヲ学ヒ文学ニハ初メ八木氏トナリシカ其後佐坂氏を師トシ大学ヲ始メタリ、時ニ同二年ナリ、同四年ノ春ト成リ三月国元ヘ帰国スルニ付文習ノ業ヲ中止セラレタリ、論語四冊、大中二学合テ六冊ヲ終レリ、同年冬十一月出府致シ麻布ノ邸ニ住ス、同二年春又タ外池氏ヲ師トシテ習字ヲ始メタリ、文学ハ宮崎氏ヲ師トシテ再ヒ論語ヨリ始メリ、同年五月下谷ノ邸ニ転住セリ、此ニ至テ前田氏ヲ文学ノ師トシ孟子ヲ始メタリ、習字ハ矢早リ外池氏ヲ師トセリ、同三年五月帰国ニ付、両業ヲ止メタリ、国元ニ至リ乗附氏ヲ師トシ日々修道館ニ通学セシ、再ヒ孟子ヲ学ヘリ、同年秋外池氏帰国ニ付、再ヒ氏を師トシテ習字ヲ修セリ、同四年六月出京ニ付両業ヲ止メリ、出京シ麻布ノ邸ニ住ス、文学ニハ再ヒ宮崎氏ヲ師トシ四書ノ復習ヲ始メリ、此ニ至テ（安）世話ニテ日下部氏ヲ習字ノ師ト為セリ、時ニ十二歳ナリ、同年冬十月ニ相成リ洋学ヲ始メラレヨトノ事ニテ青松寺内日新義塾ヘ入社シ、正則ヲ始メリ、日々早朝ヨリ通学セリ、此ニ至テ文習二業ヲ全ク止メタリ、同五年春同社ヲ退社セリ、同年六月ヨリ勧学義塾ヘ入塾シ正則ヲ学ヘリ、同六年春同社ヲ退社セリ、同年四月ヨリ慶応義塾ヘ入塾シ変則ヲ始メ「リートル」ヨリ修業セリ、時ニ十四才ナリ、同十年春ヨリ海上氏ノ宅ヘ行キ外史を始メリ、漸々ニシテ企メリ、同年夏同塾ヲ退塾セリ、入塾ヨリ今日迄テ少々ノ書冊ヲ終リ英国史迄テ進メリ、同年十一月当塾ニ入塾ス、佛国史ヨリ始メ同十一年八月ニ至リ猶々当塾学課ノ書を終リタリ、英政大書ニテ終レリ、当年春トナリ実地ノ事ヲ述ヘタレトモ未タ漢学ヲ知ラサルニヨリ安波ヘ通学シ国史略ヨリ始メ今日エ至リ外史迄テ進ミタリ、夫レ余カ教育ヲ受ケル始メタルハ五才ヨリナレトモ十三才迄テハ雲中ヲ行クシ心体ナリシカ十四才ニ及ヒ少シク心付キタリ、十八才ニ至リ真ニ学業ヲ脩ムル事ニ決セリ、其後今日迄テ右ノ心得ナリ

余カ学業ノ略歴如之　六月三日認ム

右の史料によれば、「慶応二年（一八六六）七歳（数え）より、八木氏を師匠としてイロハ四八文字から手習い（習字）をはじめ、江戸時代の武士が受ける教育のうち最も重視された儒学、漢学を学んだ。また、それまでは江戸藩邸で個人教授を受けていたが、棚倉藩知事となって明治三年（一八七〇）五月に帰国後は、国元で乗附氏を師として、藩校修道館[7]に通学した。その後、明治四年（一八七一）一〇月、一三歳から洋学をはじめ、最初は青松寺内（現東京都港区）の日新義塾（不明）へ入社し、同五年春に同社を退社。六月から勧学義塾に入塾し、正則（外国人教師について意味と発音を正しく学ぶこと）を学ぶ。勧学義塾とは、東京府愛宕下町二丁

目乙一番地にあった英語塾であるが、そこは同六年春に退社している。次に、明治六年四月に一四歳で、慶應義塾へ入塾し[8]、同一〇年春から海上氏に師事した。同一〇年十一月に一七歳で当塾（三叉学舎）に入塾した。三叉学舎は、箕作阮甫の養子である箕作秋坪が開いた英語塾で、日本橋蛎殻町の津山藩中屋敷の隣接地にあった。洋学を志す子弟を教授し、数百人の門弟がいたといわれる[9]。このように洋学塾に通う一方、いまだ漢学を習得していないということで、安波（安並とも書かれる。教師名＝不明）へ通学し、国史略より外史まで進んだ」というような内容が記され、正功が受けた教育の過程を知ることができる。

以上、見てきたように、正功は、江戸時代武士の教養として必須であった漢学を中心に、のちに藩主になることを想定したそれに相応しい教育を幼いころより受けていた。その上で、さらに英語塾の双璧と言われた福沢諭吉の開いた慶應義塾と、箕作秋坪の三叉学舎の両方で学んだ。いわば、当時最新の教育を受けた知識人だったといえる。ちなみに、正功は、学習院では学んでいない[10]。

正功の境遇としては、徳川幕府の譜代大名の家に生まれ、明治維新の際には幕府側に与し、新政府の世となり、政治的な方向や立身出世といった道を選ぶことが難しい状況にあったと推測される。それに加え、生来、学問好きであったということが、学問により熱中していくもととなったと思われる。

（二）さらなる学問研鑽と地学協会への入会

その後も、正功は、学問中心の毎日を送った。では、正功はいつ頃から遺跡や遺物など考古学的関心を持つようになったのだろうか。

例えば、次にあげるのは、明治一四年（一八八一）の日記の一部分である[11]。

三月一日曇
本日、上野公園内第二回勧業博覧会開館式ニ付、安並方モ休業ス
二日晴
後二時ゟ安並へ通学、三時過帰舎
三日曇
後二時ゟ安並へ通学、三時過帰舎
四日雨
前六時ゟ安並へ通学、七時過帰舎、九時ゟ博覧会縦覧ニ行ク、三時過帰舎
五日曇
前六時ゟ安並へ行ク、七時過同所出ツ、九時帰宅、十一時森同道ニテ博覧会ニ趣キ数品ヲ約定ス、五時退場、六時前帰宅
六日雪
前七時半出宅、博覧会へ行キ数品ヲ約条ス、十二時前退場、一時過帰宅、六時過出宅、七時復舎

このように、明治一四～一六年（一八八一～八三）の正功の日記には、ほとんど毎日朝早くから三叉学舎や安並の所へ通い、そのかたわら、上野の教育博物館（後の国立科学博物館）や帝室博物館（現東京国立博物館）、勧業博覧会などに訪れている記事が度々見える。若い頃から、考古学と言おうか、古物、博物学的な方面に興味があったことがわかり、のちにその方向に進む萌芽が感じられる。

この時期に、特筆すべき動きとしては、明治一五年（一八八二）四月に地学協会に入会していることがあげられる。

日記には、次のように出てくる。

（明治一五年四月）九日雨[12]
前八時出宅、番丁北澤〈正誠〉、小石川松平家〈春嶽・慶永〉へ行ク（但地学協会入会之件）、十時帰宅、四時出宅、五時過帰舎

〈　〉内筆者注

正功は、北澤正誠（一八四〇～?）と松平春嶽（一八二八～一八九〇）の紹介で、地学協会に入会している。北澤正誠は、松代藩士として生まれ、

佐久間象山の弟子で学者であり、明治維新後は官僚となり、また地学協会の幹部として活動していた人物である。[13] 松平春嶽（慶永）は、第一六代福井藩主であり、幕末の政局の中で政治総裁職を務めるなど活躍した人物であることはよく知られている。

地学協会とは、明治一二年（一八七九）に学習院内に地学の総合的な発展・普及を目的として北白川能久親王を社長として創立された学会である。もともと、外務省にいた渡辺洪基や榎本武揚らが、海外における地理学協会の存在を知り、地学が国の発展に貢献することが大であることに着目し、日本でも必要性を感じたところからはじまるという。初期の会員は政治家、外交官、軍人、華族で構成されていたとされる。[14] 当時、その団体に属することは、上流社会の嗜みのような意味合いを持っていたといえるかもしれない。しかし、正功は、地学および地理学を勉強したいという学問的興味から、地学協会に出入りするようになり、例会に熱心に参加している。また、その影響からか、例えば、日記には、彗星の現出などの天文学に関心を示す記事も見られるようになる（明治一五年十月三日・四日・八日）。[15]

さらに明治一六年（一八八三）には、塾に通うだけにはとどまらず、修学のため、先述した地学協会の幹部であった北澤正誠の家に自宅を出て住み込んで勉学を続けるという記事が日記に出てくる。

（明治一六年三月）十五日快晴[16]

後二時頃ゟ正外殿御出、次ニ安川来ル、五時出宅、中六番町九番地北澤正誠方へ寓転、「但修学之為ニテ此度寓転之儀ニ附テハ初メ慶永公之御指図ニシテ安川ヲ以テ北澤へ申込ニ根スルナリ」、先是森順三郎押トシテ荷物ヲ送ル、六時過森帰邸、同夜先生始メ家族一同下婢下男迄面会、同夜十一時床入

正功が学問の道に邁進していることをよく示す一つのエピソードである。

（三）坪井正五郎との出会い

明治二〇年（一八八七）六月二八日、正功は、地学協会の例会において講演者であった坪井正五郎[17]に出会っている。坪井正五郎は、文久三年（一八六二）に父は幕府奥医師坪井信道、祖父が有名な蘭学者という学問一家に生まれ育った。のちに箕作秋坪の娘なおと結婚している。明治一七年（一八八四）に人類学会の前身である「じんるいがくのとも」を組織するなど、この頃既に新進気鋭の研究者として頭角をあらわしていた。この時、正功は二七歳、坪井は二四歳で、三歳違いであった。

日記からその記事を抜き出しておく。

明治二十年六月二十八日[18]

在宅、午後六時三初君・盛服同道、地学協会へ出席、幻燈図有之、坪井正五郎過般伊豆七島周遊ノ記事演説セリ、右了テ棚倉ゟ持参ノ小瓦ヲ坪井氏ニ覧定セシタルニ紋形ハ菊ニテ武蔵多摩郡府中古趾より出ル品ト同種ナリト述ヘリ（後略）

正功は、地学協会の例会の講演者の坪井正五郎に棚倉より持参した古瓦について質問をし、それに対して坪井は、紋形は菊形で武蔵国多摩郡府中の古跡から出る品種と同種のものと答えている。

これが坪井正五郎との初めての出会いであり、以後、正功は人類学・考古学へ急速に熱中していく。先行研究によれば、坪井に主導された初期の人類学教室は、研究者だけにとざされたものではなく、アマチュアにも広く開かれたものであり、また江戸時代から続く古物・好古趣味の系譜上にあったことや、そこには幕府方の子弟が多く集まっていたことなどが指摘されている。[19] このような集まりであった人類学会は、正功にとっては身を置きやすく、学問的好奇心を満たす格好の場所であったと思われる。

表1　明治21～25年（1888～1892）阿部正功が行った発掘調査

調査日	回数	調査地	現在地/遺跡名	遺跡				収集遺物など		
明治21年9月6日・同9年9月30日・24年3月30日・25年12月5日	4	武蔵国荏原郡鵜ノ木村千鳥窪貝塚	東京都大田区/千鳥窪貝塚			横穴24か所		土器破片68個	石器20個	
明治21年9月6日・同25年5月31日・同年12月5日	3	武蔵国荏原郡馬込・池上村	東京都大田区/馬込貝塚	貝殻数種				土器破片46個	石器4個	
明治21年9月29・30日・同25年12月5日	3	武蔵国荏原郡入新井村	東京都大田区	貝殻少量		横穴数か所	古墳2か所			
明治21年9月30日・同25年5月31日・同年12月5日	3	武蔵国村荏原郡大井村	東京都大田区/大森貝塚・庚塚貝塚ほか	貝塚6か所		横穴1か所		赤色土器細片3個		
明治24年2月15日・同年5月4日	2	武蔵国村荏原郡中目黒・下目黒村	東京都目黒区/上目黒貝塚・碑文谷貝塚[正功発見]					土器破片48個	石器20個	
明治24年4月12日	1	武蔵国新座郡白子村	埼玉県和光市/北城山白子貝塚			横穴1か所		土器破片16個	石器10個	
明治24年6月24日	1	武蔵国北豊島郡日暮里村字延命院跡貝塚	東京都荒川区/延命寺貝塚					土器破片43個	石器1個	磨製石斧1個
明治24年6月26日	1	根岸金杉村・中里村	東京都台東区/東京都北区・田端中里貝塚					土器破片6個		
明治25年1月29日・31日	2	東京赤坂区青山墓地・梅窓院山	東京都港区/青山墓地内貝塚[正功発見]					土器破片52個	石器2個	
明治25年1月31日・3月22日・12月9日	3	東京赤坂区青山5丁目字長者ガ丸	東京都港区長者ケ丸貝塚[正功発見]	貝塚2か所				土器破片67個	石器10個	
明治25年3月22日	1	東京赤坂区青山立山墓地近傍	東京都港区/青山6丁目貝塚	貝塚2か所				土器破片24個		
明治25年1月28日	1	相模国淘綾郡大磯駅裏山横穴	神奈川県中郡/ 楊谷寺谷戸横穴墓群 か			横穴90か所		祝部土器・朝鮮土器3個		
明治25年4月16日	1	武蔵国橘樹郡鶴見川西岸駒岡・師子ガ谷・末吉村地域	神奈川県横浜市鶴見区/長原塚貝塚・同獅子ヶ谷町遺跡群・小仙塚貝塚	貝塚2か所	石器製作場跡	横穴5か所	古墳11か所	土器破片83個	石器56個	
明治25年4月17日	1	武蔵国南豊島郡下渋谷村	東京都渋谷区	貝塚3か所	石器製作場跡			土器破片13個	石器7個	
明治25年4月23日	1	武蔵国北足立郡赤井・前野宿・東貝塚村、大竹諸村丘頂	東京都板橋区/前野町遺跡ほか	貝塚2か所				土器破片54個	石器6個	埴部土器破片4個
明治25年4月24日	1	武蔵国橘樹郡鶴見・東寺尾・馬場・北寺尾・師子ガ谷5か村にわたる丘頂	神奈川県横浜市鶴見区/荒立貝塚・馬場貝塚・北寺尾遺跡群ほか	貝塚8か所	土器塚3か所			土器破片34個	石器17個	
明治25年5月19日	1	武蔵国橘樹郡生麦・東寺尾・字白幡・西寺尾・子安の諸村にまたがる丘頂	神奈川県横浜市鶴見区/荒立塚貝塚・番神台遺跡ほか	貝塚1か所	石器製作場跡		古墳3か所	土器破片72個	石器37個	
明治25年5月21日	1	下総国東葛飾郡奉免・古作諸村の丘頂	千葉県市川市・奉免貝塚/千葉県船橋市・古作貝塚ほか	貝塚2か所				土器破片174個	石器2個	獣骨1
明治25年5月31日	1	武蔵国荏原郡下蛇久保・上大崎・白金諸村	東京都品川区/上大崎貝塚ほか	貝塚1か所				土器破片10個	石器1個	
明治25年6月7日	1	武蔵国北豊島郡池袋・小豆沢・十条・西ケ原諸村	東京都板橋区・小豆沢貝塚/東京都北区・西ケ原貝塚ほか	貝塚3か所			古墳2か所	土器破片188個	石器5個	埴部土器破片1個
明治25年7月3日	1	小石川植物園・大原町・遠藤所有地にある遺跡	東京都文京区/小石川植物園貝塚・原町貝塚ほか	貝塚5か所				土器破片2個		
明治25年7月5日	1	北多摩郡東南部（喜多見村）、荏原郡西部遺跡（上沼辺村貝塚）	東京都世田谷区・喜多見古墳/東京都大田区・上沼部貝塚[正功発見]ほか	貝塚1か所	土器塚1か所	横穴1か所	古墳8か所	土器破片166個	石器2個	埴部土器破片3個
明治25年7月10日	1	武蔵国南埼玉郡蓮田村・北足立郡小室村	埼玉県蓮田市・関山貝塚/北足立郡伊奈町・小貝戸貝塚ほか	貝塚2か所				土器破片62個		
明治25年7月24～26日	1	東海道三遠相武地方へ旅行（額田郡丸山村・碧海郡小針村ほか）	愛知県岡崎市ほか	貝塚1か所	土器破片散布地2か所	横穴80余か所	古墳7か所	祝部土器破片20個	石器5個	土器破片・石器185個
明治25年7月30日	1	武蔵国西部遺跡遺物（南多摩郡南隅原町田近傍・都筑郡荏田村ほか）	神奈川県青葉区			横穴7か所		土器破片1個	石器2個	
明治25年8月28日	1	武蔵国横見郡吉見村	埼玉県比企郡/吉見百穴		土器破片散布地	横穴240余か所		土器破片7個、埴部土器破片2個	石器2個	
明治25年10月2日	1	荏原郡雪ヶ谷下沼辺村	東京都大田区/下沼部貝塚	貝塚2か所			古墳2か所	土器破片119個	石器33個	獣骨1俵
明治25年10月3日	1	東多摩郡片山村・北豊島郡下練馬・上赤塚・西台村	埼玉県北足立郡/東京都練馬区・板橋区	貝塚1か所	土器破片散布地			土器破片12個		
明治25年10月14日	1	下総国東葛飾郡座生沼沿岸丘頂	千葉県野田市	貝塚7か所				土器破片32個		獣骨若干
明治25年10月16日	1	野田町南方江戸川東岸丘頂	千葉県野田市	貝塚5か所				土器破片若干	石器1個	土器6個
明治25年11月7日	1	東京芝公園紅葉館、庭内崖腹	東京都港区/芝紅葉館内貝塚	貝塚				土器破片細小片		
明治25年11月21日・22日	2	武蔵国久良岐郡本牧・根岸・石川中・戸部の諸村	神奈川県横浜市中区/門間平台貝塚/根岸坂下貝塚/西区・藪下町貝塚ほか	貝塚3か所				土器破片20個		
明治25年11月29日	1	武蔵国北豊島郡西ヶ原	東京都北区西ヶ原/西ヶ原貝塚	貝塚1か所				土器破片105個		獣骨・色料
明治25年12月2日	1	武蔵国荏原郡衾村・碑文谷村	東京都目黒区/上目黒貝塚・碑文谷貝塚[正功発見]	貝塚2か所				土器破片33個	石器13個	土器破片敷布地
明治25年12月11日	1	武蔵国荏原郡上目黒村	東京都目黒区/上目黒東山貝塚[正功発見]	貝塚2か所				土器破片24個	石器5個	
明治25年12月15日	1	武蔵国南豊島郡代々木村	東京都渋谷区/西原貝塚[正功発見]	貝塚1か所				土器破片5個		

注)「石世遺跡捜索記」(阿部家史料1333)より作成

二、人類学会入会後～明治二〇年代

（一）発掘調査・遺物収集への傾倒と人類学会での活躍

正功は、坪井正五郎と出会った後、しだいに人類学会会員たちと親しくつきあうようになり、遺跡探索や人類学会例会にしばしば出かけるようになる。例えば、明治二一年（一八八八）九月三〇日には、若林勝邦（一八六二～一九〇四・東京帝国大学人類学教室勤務）と大森八景園古墳、近傍大井村貝塚、鵜ノ木村貝塚探検に初めて出掛けている。[20]

明治二三年（一八九〇）になると、東京人類学会新入会員欄に正功の名前が記され、この年に人類学会へ入会したことが確認できる。[21] 一方で、同年には、梨本宮守正王（一八七四年～一九五二年。久邇宮朝彦親王第四皇子、のちに陸軍大将）が地学に興味があるので、御学友にならないかとの誘いがあり、それを受けて就任しており、その年は宮邸に出仕したり、外出時に供をしたりという活動を中心に行っていた。[22]

明治二四年～二七年（一八九一～九三）頃は最も精力的に遺物・遺跡調査を行った時期で、発掘に行った日、場所、採集物の種類などを詳細に記した「石世遺跡捜索記」[23]など、記録を多数残している。それから作成した表1により、この頃の旺盛な活動を確認することができるだろう。そのように各所で、遺跡発掘を行う一方、人類学上の相談をするため、毛利昌教（生没年不明・人類学会員）、関保之助（一八六八～一九四五。東京帝国博物館勤務、武具や有職故実研究家）、山中笑（一八五〇～一九二八。もと幕臣であり、メソジスト派の牧師、民俗学者）など、様々な人々と交流を持った。[24]

また、明治二六年（一八九二）には、阿部正功は、東京人類学会の中央委員に乞われて任命されており、学会の運営にも深く関わっていたことも確認できる。[25] 明治二二年～二五年（一八八九～一八九二）は坪井がイギリスに留学して不在であったが、帰国後は学会の組織が固まってきた頃であったという。

『東京人類学会雑誌』に報告や例会発表を掲載しているのも、この時期に頻繁であることは、表2からみてとれる。また、このような発表活動以外にも、自ら発掘した遺物を寄贈し、寄附を行うなど、[26] 物質面や経済面からの支援も行っていた。

（二）鳥居龍蔵との交流

人類学会内では、正功は、若林勝邦や八木奘三郎（一八六六～一九四二。明治二四年（一八九一）に帝国大学人類学教室標本取扱）をはじめとして様々な人とつきあいがあったが、中でも鳥居龍蔵とは親しくしている。鳥居龍蔵は、明治三年（一八七〇）徳島県に生まれ、同一九年に人類学会に入会し、坪井正五郎を頼って東京に出て、同二六年に東京帝国大学人類学教室標本整理係となっていた。[27]

表２『東京人類学会雑誌』中阿部正功主要報告一覧

記事名	巻数	号数	刊行年	種別
第78例会「下総古作村の貝塚、武蔵西ヶ原村ノ貝塚ノ採集品ニツキ談話」	7	76	明治25年（1892）	記事
第81例会 「下総国東葛飾郡山崎村ノ貝塚」	8	81	明治25年（1893）	記事
埼玉県五郡遺跡	8	88	明治26年（1893）	雑報
第88例会「埼玉県下ノ遺跡」	8	90	明治26年（1893）	記事
第91例会「北足立郡小谷場村ノ貝塚」	9	93	明治27年（1894）	記事
「武蔵ニ於ケル、貝塚、横穴、其他遺跡地名表」	9	96	明治27年（1894）	雑報
第95例会「水戸地方の遺跡」	9	97	明治27年（1894）	記事
第96例会「庄内地方ノ土俗に就テ」	9	98	明治27年（1894）	記事
「南洋サイパン島の土俗」、「南洋サイパン島土人オグレ（人名）との対話」	9	102	明治27年（1895）	論説及報告
「武蔵国秩父地方に於ける人類学的旅行」	10	110	明治28年（1896）	論説及報告
第119例会 「相州箱根近傍見聞談」	12	127	明治29年（1897）	記事

出典）『東京人類学会雑誌』

『日記』に最初に鳥居龍蔵の名前が出てくるのは、明治二六年（一八九三）五月一二日のことである。[28] 鳥居と正功が知り合ったのはちょうどその前頃であろう。

十二日晴

（前略）人類学会員鳥居龍蔵、内山九三郎、大野延太郎三名ハ鶴見村貝塚地名問合之書状来ル、右ニ付、午後六時出宅、坪井方ニ至り主人来訪ニ逢フ、同夫人ハ故箕作先生之末女久々ニテ面会ス、正五郎氏ニ本日鳥居ハ書状ノ趣ヲ談シ、且述ヘ曰ク、過日来鶴見地方発掘談判中ナレバ明後日三人ト同地へ赴クハ右談判之不都合トナル間、鳥居氏へ是趣通セラレタシ云々、坪井氏承託了テ帰宅

（―線筆者）

これ以降、書状のやりとりをしたり、人類学上の件や人類学会拡張について語りあったり、遺跡発掘に共に行くなど、鳥居とは急速に親交を深めていった。

明治二六年八月には、鳥居龍蔵が発起人となり、人類学会の夏期講習会に参加した者に呼びかけ生活慣習を語り合う土俗談話会（土俗会）が開かれている。この会は、明治三三年（一九〇〇）まで続き、その会合は七回を数えた。[29] 民俗学史の研究では、これまで人類学会の影響はあまり評価されてこなかったが、近年では、土俗会の活動を今日の民俗学研究につながるものとして積極的に位置づける研究もみられる。[30] このような鳥居による土俗会の活動が、正功が土俗に目を向けるきっかけとなったものと推測される。

明治二八年（一八九五）四月、正功は、鳥居と画工として大野延太郎（一八六三～?）。帝国大学人類学教室画工、のちに助手）を伴い、秩父の土俗調査に出かけている。その時の成果として、「秩父地方探見録」を著している。[31] この「秩父地方探見録」については、本誌で石尾氏が阿部正功と鳥居龍蔵の交流の一端として紹介されているので、そちらをご覧いただきたい。[32]『東京人類学雑誌』には、阿部正功・鳥居龍蔵・大野連名で「武蔵地方に於ける人類学的旅行」という報告を発表している。[33]

この秩父地方への調査旅行の際も費用は正功持ちであった。また鳥居は、同年八月に人類学会から遼東半島への海外調査へ派遣されることとなるが、正功から餞別として金一〇円の寄附を受けている。[34] 石尾氏も指摘するように、上京間もないころの経済的に困窮する学究生活を支援したのが阿部正功だったということができるだろう。[35]

その後も、鳥居との交流・援助は長く続いたことが、次の事例からも確認できる。大正一四年（一九二五）、鳥居は、『人類学上より見たる我が上代の文化（1）』[36]という本を出版している。序言の最後にこう記されている。

「九月二十日

麻布霞町阿部山の我が書斎にて

鳥居龍蔵」

大正一四年（一九二五）といえば、正功が亡くなる年である。この頃まで鳥居が阿部家の敷地内に住み、執筆していたことが確認できるのである。

（三）集古会への参加

人類学会をもとにして、土俗会をはじめとしてさまざまな団体ができていくが、その中の一つに「集古会」がある。集古会とは、明治二九年（一八九六）一一月、考古と歴史を愛する趣味人の集りとして、入会制限もない自由な会として発足した。佐藤伝蔵・大野延太郎・八木奘三郎、林若吉、田中正太郎が発起者であった。正功も集古会に勧誘されて、入会し、第一回の会合に出席している。参加者は二一名であった。正功は、その際に「趙明刀　列国之時趙国　新明邑所鋳貨幣　一個」を出品している。[37]

（四）考古学会への入会

明治二九年（一八九六）、人類学から考古学が分かれ、考古学会が設立された。同年四月二八日の午後一時より発会式をかねて第一回常会が東京美術学校講堂にて開会された。まず下村三四吉（一八六八～一九三八）が開会の主旨説明をした後、初代考古学会長となった三宅米吉（一八六〇～一九二九。のちに帝室博物館総長や東京文理科大学学長）により考古学の定義などが講演された[38]。正功も、若林勝邦らに誘われて考古学会に入会して、二円を寄附している。それに対し、考古学会設立に中心的役割を果たした下村三四吉からは、書状で礼を述べられている[39]。

集古会もそうであったが、新しくできた考古学会は人類学会と分離したとはいえ、会員は人類学会と重なっている部分が多かった。これは、当時の人類学は、今日考えられている自然人類学、文化人類学の二分野以外にも、動物学、解剖学、生理学、地質学、考古学、歴史学、民俗学などを含んだ総合的な学問であり、未分化な状態であったことによるであろう。正功は、新しい学会が作られ、乞われると入会し、経済的支援をしている。

正功がいつまで、考古学会に加入していたかは不明である。ただし、明治三七年（一九〇四）までは「考古学会会員宿所姓名簿（明治三七年七月調）」に名前が載っていることから、その頃までは加入していたことが確認できる[40]。

三、明治三〇年代以降の動向

（一）芝丸山古墳発掘と以後の研究活動

ここでは、明治三〇年代以降の正功の発掘調査活動や人類学会との関係を見ていこう。

明治三〇年（一八九七）一〇月、正功は、麻布霞町の自邸内で古穴を発掘している[41]。これは、新築工事の土盛のため住宅裏の畑地を土取場と定め、そこを人夫に掘らせていたところ、土取穴の北西北面に横穴を偶然発見したことによる。八木奘三郎、若林勝邦、蒔田鎗次郎（生没年不詳・幕臣出身、弥生式土器の研究で有名）、野中完一（生没年不詳・坪井正五郎のもとで『日本石器時代人民遺物発見地名表』第2・3版編纂）、毛利昌敬など、人類学会や考古学会で親しくしている者を自邸に呼び、現場や出土物を観覧させている。出土物としては、徳利などの瀬戸物・土器類が出てきたという。

正功の発掘活動のクライマックスといえるのが、明治三一年（一八九八）の芝丸山古墳（現東京都港区）発掘調査への参加である。発掘は、坪井正五郎の主導によって三月六日から開始され四月二九日に終了した。当初は一見学者として見物していた正功であったが、坪井にその発掘を任された野中完一を手伝うようになり、毎日のように現場に通い、共に作業を行っている。正功によって、その際の作業を詳細に記録した「芝円山古墳調査略記[42]」が残されている。この調査略記およびその内容については、本誌の高山優氏の論文[43]にくわしいので、そちらを参考にしていただきたい。この芝丸山古墳発掘は、世間の注目を集めた発掘であった。

また、この時期の人類学教室の活動の大きな柱の一つとして、『日本石器時代人民遺物発見地名表』の編纂があげられる。帝国大学人類学教室によって遺跡探訪の手引きとして編纂された地名表で、第五版まで刊行された。たとえば、第一版の『日本石器時代人民遺物発見地名表[44]』によると、正功が報じた地名が六三か所掲載されている。阿部家史料の中には、第二版明治三一年（一八九八）五月発行の第二版の地名表[45]も残っているが、正功による訂正加筆が朱で書き入れられるなど、地名表への協力、高い関心が寄せられていることが確認できる。

明治三三年（一九〇〇）には、麻布霞町の敷地内の借地の中に借家人の芥溜を作ろうとして裏手の明地を掘ったところ、再び別の土窟を発見し、発掘調査を行っている。この時は、「土窟調査御届」を麻布警察署に提出している[46]。

このように明治三〇年代前半までは、人類学会の例会に出たり、土俗調査に出かけたり、鳥居龍蔵や坪井正五郎などをはじめとする人類学会・考

古学会会員と交際するなど、以前程ではないが活発な活動が見られたが、三〇年代後半になると次第に学会活動・発掘調査活動から遠ざかっていく。

明治三七年（一九〇四）、人類学会二〇周年の記念式典が開催された。正功は、当然来賓として呼ばれているが、『日記』にも『人類学会雑誌』にも出席したことは記されていない。[47] 以後、日記には、人類学、考古学に関係する記事があまり見られなくなる。

ではなぜ、明治三〇年代以降、人類学会・考古学会の活動から遠ざかっていったのだろうか。一番の理由としては、正功も四〇代に入り、年をとったという年齢的なことがあげられるだろう。しかし、確たる理由はわからない。正功自身もそれについては特に述べておらず、不明であるが、なんらか影響を与えたのではないかと推測できる事象を指摘しておく。

明治三五年（一九〇二）二月、公爵二条基弘が主催して華族人類学会という組織が作られている。坪井正五郎の指導のもとに、侯爵蜂須賀正韶、同浅野長之らが参加している。[48] 正功も子爵で華族であったから資格はあったであろうが、その集まりには参加していない。また、二条公爵は、銅駝坊陳列館（二条家人類学標本陳列室）という館を作り、そこで収集した遺物を陳列した。いわば正功が自邸に開いていた土俗陳列館と同様のものだったと考えられる。正功は、このような動きをどう思って眺めていたのだろうか。

また、日清戦争、日露戦争を経て、人類学・考古学という学問は、植民地主義、帝国主義といった政治的な影響を大きく受けざるをえなくなっていくという時代的な背景もあり、[49] そのような動向も一つの要因として影響を与えたとも考えられるのではないだろうか。

（二）坪井正五郎の死

大正二年（一九一四）、坪井正五郎は、サンクトペテルブルグで行われた万国学士院連合大会に出席したのち、五月二六日にその地で客死してしまう。享年五〇歳であった。

正功が、坪井の死を知ったのはいつかはっきりとはわからないが、日記には次のように出てくる。[50]

（七月）三日晴八十度
在宅、坪井直子ヘ忌中見舞トシテ菓子一折ヲ外池ニ持参セシム

その後、坪井の図書の寄附の件につき石田収蔵[51]（一八七九～一九四〇）とやりとりをしていることが日記に見える。石田収蔵は、明治三八年（一九〇五）頃に東京人類学会に入会し、幹事などで活躍した坪井晩年の弟子にあたる。

（大正三年三月）三日晴六十三度昨夜中雷鳴降雨[52]
在宅、（中略）…人類学教室石田収蔵ヵ故坪井氏図書寄附之件ニ付、諾否ノ問合来ル、川勝来り正勝ヲ自宅ヘ呼ビ嘆願ノ決着を聞クト申ス
四日快晴六十四度
在宅、（中略）…人類学室石田氏ヘ代策ニテ返書ダス
五日晴六十三度
在宅、（中略）…人類学教室石田収蔵ヘ向ケ小為換ニて金五円也ヲ送ル、之ハ坪井氏図書寄附ニ由ル

その後大正五年（一九一六）『東京人類学会』の名簿には、阿部正功の名前が見えなくなる。[53] その前から人類学会から距離をおきつつあった正功に、親しかった坪井正五郎の死は、さらに影響を与えたものと推察される。また、坪井の死により、東京人類学会も一旦勢力を失う。それと共に在野の考古家や遺物採集家の活躍の場もせばまっていく結果となったものと考えられる。

おわりに～正功死後

以上、阿部正功の生涯と学問・研究活動の軌跡を追ってみてきた。明治

初期の人類学・考古学の草創期に阿部正功が果たした役割に大きいものがあったことを確認できたと思う。また、坪井正五郎、鳥居龍蔵とは特に相互に影響を与えあう関係にあったことが指摘できる。しかし、本稿は、正功の足跡を表面的になぞるにとどまっている。今後は、さらに『日記』や周辺の史料も合わせ読み解き、阿部正功の学問研究活動を学史上に位置づけるということを試みたい。

大正一四年（一九二五）九月一一日、正功は、六五歳で没した。その死後、生前に収集された厖大な遺物はどうなったのかについて最後にみておこう。

昭和一一年（一九三六）、遺物は、正功の孫にあたる阿部正友氏によって、京都帝国大学（現京都大学）・学習院・東京文理科大学（現筑波大学）の三か所に寄贈された。

次の史料は、遺物を配分する際に作られた目録である。[54]

阿部家収蔵考古学的遺物目録

（一）石器

Ⅰ、石斧類板綴付五拾枚（1～50）

武蔵荏原郡、橘樹、都筑、豊島、西多摩、南埼玉、北多摩、入間、北足立、新座、横見、北足立、東京市内、各地出土（内若干を学習院へ―鍋島―）

Ⅱ、石鏃類重ね箱拾枚（51～60）

武蔵磐城出土の石鏃、メキシコの石斧、磐城出土の石錘等

Ⅲ、石皿石棒類（61～63）

（二）土器（縄文式、弥生式（？）、祝部）

Ⅰ、土偶　磐城西白河郡白河町出土（64）

Ⅱ、縄文式土器壺及鉢（65～73）

下総東葛飾軍出土品其他（此内完形土器五個を文理科大学、参（訂正して）五個を学習院へ夫々配分―肥後、鍋島）

Ⅲ、縄文式土器破片（74～103）

武蔵国下総国各地貝塚出土（内数片を学習院へ―鍋島―）

Ⅳ、弥生式土器（？）壺（104）

Ⅴ、祝部土器壺其他（105）（106）（文理科大学へ肥後）

Ⅵ、祝部土器破片（107）（文理科大学へ肥後）

（三）其他古墳出土品、古瓦土俗品等

Ⅰ、埴輪破片（108）

Ⅱ、古瓦（109）（文理科大学へ―肥後―）

水戸市郊外出土

Ⅲ、石製釜及鍋（110　111）（文理科大学へ―肥後―）

朝鮮近世使用

Ⅳ、土器製作模型（112）

右石器・土器類は大部分を京都帝国大学文学部考古学教室資料とし、若干分を東京文理科大学並に学習院に於いても資料として夫々配分す。本目録は二通を作成し、阿部家、京都帝国大学文学部考古学教室に各一通を保管。但し右の精細なる調書は後に阿部家に提出す。

昭和十一年六月三日

右

肥後和男
鍋島直康
末永正雄

これによれば、もっとも多くの遺物が京都帝国大学に分けられている。大正五年（一九一六）に濱田耕作（一八八一～一九三八）により考古学教室が開かれ、考古学が盛んであった京都帝国大学が寄贈先に選ばれたことはある意味当然であろう。ちなみに、明治三三年（一九三六）四月に正功は、墓参りのため京都に旅行しているが、その時に京都帝国大学に立寄り、濱田耕作と会っており、面識があったことから、その縁によるものなのかもしれない。[55] また、この時の寄贈の手続きを実際に行っているのは、当時

浜田耕作に師事していた末永政雄（一八九七～一九九一）であった。ちなみに末永は、橿原考古学研究所を創設し、高松塚古墳など多数の発掘調査を行うなどのちに有名な考古学者となる人物である。

京都帝国大学へ寄贈された収集遺物は、現在は京都大学総合博物館に所蔵されていることは確認している。[56] 京都大学総合博物館に行けば、阿部正功の明治二〇年代から三〇年代初期の旺盛な発掘調査・学問活動の痕跡である遺物を今でも見ることができるのである。一方、それ以外に若干が寄贈されたという東京文理科大学（現筑波大学）・学習院に正功が収集した遺物が残っているかどうかについては今のところ不明である。これについては今後、調査を進めたいと考えている。

〔追記〕本稿の作成にあたっては、阿部家当主の阿部正靖氏に史料の利用をはじめ、様々なご高配を賜りました。京都大学総合博物館での調査では、東村純子氏に大変お世話になりました。ここに記して感謝を申し上げたいと思います。

注

（1）考古学史上、重要な足跡を印したが、無名の人物の評伝を扱った文献として、以下のような文献がある。斉藤忠『考古学史の人びと』（第一書房、一九八五年）、杉山博久『魔道に魅入られた男たち―揺籃期の考古学界―』（雄山閣出版株式会社、一九九九年）。

（2）阿部正功に関する史料は、阿部正靖氏寄託・学習院大学史料館収蔵「陸奥国棚倉藩主・華族阿部家史料」（『学習院大学史料館収蔵資料目録一七号 陸奥国棚倉藩主・華族阿部家資料目録』二〇〇一年）に含まれている。

阿部家は、譜代大名で、老中など幕府の要職を務めた人物を輩出した家柄である。第二代藩主阿部忠秋の時に武蔵国忍（現埼玉県行田市）を与えられ、三代正武の代に一〇万石を領するようになった。以来一八四年間忍を治めたが、文政六年（一八二三）に陸奥国白河（現福島県白河市）へ転封され、その後棚倉（現福島県棚倉町）に移され、その地で維新を迎えた。維新後、第一八代藩主正功は子爵を授けられ、華族に列せられた。本史料は昭和四三年（一九六八）に学習院大学に寄託され、総数四七〇〇余点にのぼる。以下、本稿で、阿部家史料を引用する際は、「阿部史料番号」とする。

（3）『平成二二年度学習院大学史料館特別展　目白の森のその昔　学習院と考古学』図録（学習院大学史料館、二〇一〇年）一～三頁。

（4）なお、筆者は、考古学、人類学、民俗学いずれの専門でもないことから、正功が行った調査や発掘の評価には立ち入らないことにする。

（5）阿部六二二～六六五。正功は、明治一二年（一八七九）一九歳から大正一四年（一九二五）死の直前まで四七年間にわたって日記を書き続けた。その日記には、在宅か外出したか、何処へ誰を訪ねたか、誰と会ったか、などが詳細に書かれており、動向が克明に追うことができる貴重な史料である。

（6）阿部六二二―二

（7）修道館とは、白河で文政八年（一八二五）に第一一代阿部正篤が開いた藩校である。阿部家が白河から棚倉へ領地替えとなると同時に同地に移った（『白河市史第2巻通史編2近世』白河市、二〇〇六年）七六二～七六四頁。

（8）慶應義塾に明治六年四月四日に入塾していることは、慶應義塾に入社した人名を記した『慶應義塾入社帳第一巻』（慶應義塾、一九八六年）五九六頁にも記載されており、裏付けられる。その後の動向については、『慶應義塾入社帳第五巻』収載「新入帳一」（二五〇頁）によれば、明治八年八月まで在塾し、明治九年十一月一日再入塾しているという。

（9）治郎丸憲三『箕作秋坪とその周辺』（箕作秋坪伝記刊行会、一九七〇年）一四三～一五五頁。三叉学舎では、箕作秋坪の二男で、数学者であり、のちに東京・京都両帝国大学の総長を歴任する菊池大麓（一八五五

〜一九一七）や、同じく秋坪の三男で海洋動物学者となった箕作佳吉（一八五七〜一九〇九）とも出会っている。

(10) 学習院では学んでいないのかという素朴な疑問が生じるが、学習院が華族子女の教育のための学校として神田錦町に開設されたのは、明治一〇年（一八七七）であり、その時正功は既に一七歳になっており、適正な入学年齢を超過していたことが理由であると考えられる。

(11) 阿部六二四

(12) 阿部六二五―一

(13) 松下軍次『信濃名士伝』初編（一八九四年）四六三〜四八二頁。

(14) 東京地学協会ホームページ

(15) 阿部六二六―一

(16) 阿部六二七―一

(17) 国史大辞典』第九巻（吉川弘文館、一九八八年）八〇三頁。

(18) 阿部六三二

(19) 坂野徹『帝国日本と人類学者　一八八四―一九五二』（勁草書房、二〇〇五年）一六〜二〇頁。寺田和男『日本の人類学』（思索社、一九七五年）四一頁。

(20) 阿部六三三

(21) 『東京人類学会雑誌』五巻四七号（一八九〇年）

(22) 阿部六三五―一

(23) 阿部一三三三

(24) 阿部六三六〜六四一

(25) 『東京人類学会雑誌』八巻九〇号（一八九三年）

(26) 明治二六年（一八九三）一月、土器一箱、獣骨一箱、土器片、貝殻一個を寄贈している（『東京人類学会雑誌』八巻八二号、一八九三年）。また、明治二八年（一八九五）には、金一〇円を寄附している（『東京人類学会雑誌』一〇巻一〇六号、一八九五年）

(27) 徳島県立博物館編『鳥居龍蔵の見たアジア　徳島の生んだ先覚者』（徳島県立博物館、一九九三年）。

(28) 阿部六三八

(29) 曽我部一行・及川祥平・今野大輔「『人類学雑誌』考―民俗学の揺籃期」（『成城文芸』二〇一、成城大学文芸部、二〇〇七年一二月）一一九〜七二頁。

(30) 注(29)論文および福田アジオ『日本の民俗学「野」の学問の二〇〇年』（吉川弘文館、二〇〇九年）四一〜四八頁など。

(31) 阿部一三九二

(32) 本紀要八九頁〜九七頁。

(33) 『東京人類学会雑誌』第一〇巻一一〇号（一八九五年）

(34) 阿部六四〇

(35) 注（32）と同じ。

(36) 鳥居龍蔵『人類学上より見たる我が上代の文化（1）』（叢文閣、一九二五年）

(37) 『集古会誌』明治二九年一一月二十日発行（『集古』第一巻、思文閣出版、一九八〇年所収）二四〜二六頁。

(38) 『考古学会雑誌』第一号（一八九六年）

(39) 阿部家史料一四〇八

(40) 『考古学会』第四編拾弐号（一九〇五年）

(41) 阿部一四一七

(42) 阿部一四二二

(43) 本紀要四一頁〜五八頁

(44) 阿部一四一二―一

(45) 阿部一四二〇―一

(46) 阿部一四三七

(47) 『東京人類学会雑誌』二〇巻二二三号（一九〇四年）

(48) 注（1）杉山前掲書　一三五〜一三六頁。

(49) 注（19）坂野前掲書

(50) 阿部六五四

(51) 板橋区郷土資料館『特別展　石田収蔵―謎の人類学者の生涯と板橋』(二〇〇〇年)。
(52) 注(50)と同じ
(53)『東京人類学会雑誌』三一巻一一号附録『東京人類学会会員名簿』(一九一六年)
(54) 阿部一四四六
(55) 阿部一九三、阿部一四三八
(56)『京都大学文学部博物館考古学資料目録　第一部』(京都大学文学部、一九六〇年)に「阿部正友収集、一九三六年寄贈」として、遺物が多数掲載されている。これに基づき筆者は、二〇一〇年三月に京都大学総合博物館に調査に行き、収集遺物が残っていることを確認済みである。

阿部正功　略年譜

和暦	西暦	年齢	正功事跡	人類学、考古学関係記事	国内の動き
万延元年	1860	0	阿部家15代当主正耆二男として白河で生まれる		
文久3年	1863	3		坪井正五郎生まれる	
慶応2年	1866	7	阿部家、白河から棚倉へ転封		大政奉還、戊辰戦争
明治元年	1868	8	家督相続、棚倉6万石を与えられる		明治維新
明治2年	1869	9	棚倉藩知事就任		版籍奉還
明治3年	1870	10		鳥居龍蔵生まれる	
明治4年	1871	11	藩知事免職	文部省博物局設置	廃藩置県
明治5年	1872	12		湯島聖堂で博覧会開催、文部省博物館として開館	
明治6年	1873	13	慶応義塾入塾（～10年）		
明治10年	1877	17	三叉舎入舎（～14年）	モース大森貝塚発見	西南戦争
					神田錦町に学習院開校
明治15年	1882	22	地学協会入会		
明治17年	1884	24	子爵に叙せられる	坪井正五郎ら人類学会創設	華族令制定
				坪井らにより日本で初めて弥生式土器発見	
明治18年	1885	25	徳大寺照子と結婚		
明治19年	1886	26		人類学会機関紙「人類学会報告」出る、後に東京人類学会と改称	
明治20年	1887	27	**坪井正五郎と知り合う**		
			白河で日蝕観察		
明治21年	1888	28	若林勝邦らと荏原郡内の遺跡を調査		
明治22年	1889	29	御殿場・富士山調査旅行	坪井、英国へ留学	大日本帝国憲法発布
				帝国博物館設立	
明治23年	1890	30	**人類学会入会**		帝国議会開設
			湯本・八王子・東海・小河内調査旅行		
明治24年	1891	31	荏原郡野沢の遺跡を調査		
			伊香保・箱根調査旅行		
明治25年	1892	32	荏原郡野沢の遺跡を調査	坪井、英国より帰国、帝国大学理科大学教授となる	
			三河調査旅行	鳥居、人類学教室で学ぶようになる	
明治26年	1893	33	人類学会中央委員を務める（～28年）	土俗会発足、帝国大学に人類学講座設置	
			この頃、鳥居龍蔵と知り合う		
明治27年	1894	34	水戸・日光調査旅行		日清戦争はじまる
明治28年	1895	35	**鳥居龍蔵・大野延太郎と秩父調査を実施、**「武蔵秩父地方に於ける人類学的旅行」を『東京人類学会雑誌』に発表		日清戦争終わる、台湾総督府設置
			鳥居龍蔵の遼東半島行へ50円寄付	鳥居、遼東半島調査旅行	
明治29年	1896	36	**集古会・考古学会に入会**	集古会・考古学会設立	
			箱根調査旅行	鳥居、第1回台湾調査	
明治30年	1897	37	大磯調査旅行	鳥居、第2回台湾調査	
			自宅内陳列場で遺物公開		
明治31年	1898	38	**芝丸山古墳発掘調査に参加**	鳥居、第3回台湾調査	
明治32年	1899	39	白河調査旅行		
明治33年	1900	40	麻布霞町自邸内の横穴窟を発掘調査	帝国博物館が帝室博物館と改称	
明治36年	1903	43			
明治37年	1904	44	東京大学人類学会創立20周年祝賀会に出席		
明治38年	1905	45			日露戦争終わる
明治41年	1908	48			学習院、目白へ移転
大正2年	1913	53		坪井、ロシアで第5回学士院連合大会に出席し、同地で客死（享年50）	
大正5年	1916	56		濱田耕作、京都帝国大学に日本最初の考古学講座設置	
大正14年	1925	65	死去		
・					
・					
・					
昭和11年	1936			京都帝国大学・学習院・東京文理科大学に正功の収集遺物が寄贈される	